

# 手紙

根来 濤子

平成6年11月末、夫が61年の生涯を閉じた。最後に大きな呼吸を一つして、夫の脈拍は止まった。血のような夕焼けが山々の稜線を浮かび上げらせ、夕陽がまさに姿を消し去ろうとする時刻であった。夕陽の滅亡に引き込まれるように夫もこの世を去った。あの凶凶しい極彩色に塗られた日没の風景は、私の脳裏に鮮明に刻まれている。去っていく人をとどめることのできない、生きてある者の無力に苛まれていた。

2年半の闘病生活であった。国道246を走行中に車内で突然吐血して、同乗者が近くの総合病院に運んでくれた。胃潰瘍と診断され、入院治療は一月ほどだったが、順調に回復し、退院できた。

その後の2度にわたる入院検査で、膵臓に大きな腫瘍があることが分かった。診断は即断できなかったが、とにかく開腹することになって、胃を全摘、脾臓、膵頭の一部を摘出するという7時間余りを要

する大手術となった。病変部分はすべて取り除いたので、あとは体力の回復を待ただけと信じて、夫も私もあまり心配をしていなかったが、発病から2年後の、5月、又もや何度目かの検査入院となり、不審に思っていたら、夫には内密に主治医に呼び出され、夫の病名は膵臓癌であること、早急に病名がつかなかったのは非常に特殊な形態を持っていて、正確には「腫瘤形成性膵癌」というものであった。予後は半年と、はっきりと宣告された。

当時は、治らない癌は本人に告知せず、家族にだけ伝えるというのが一般的であった。ある高名な僧侶が、癌に罹患し、予後を告知されて絶望し、自死したということが問題になっていた。主治医は、夫は全快を信じ、生きる意欲にあふれているので、直接には伝えないほうがいいだろうという意見であった。回復に向かつての特別な治療はしないこと、出来るだけ自宅で自分の意志のままに生活をして、それが不可能になった時には入院してくださいという意見だった。現在は、医者は病人本人にありのままの病名を伝えることが通常である。余命が半年、あるいは3か月であろうが、事実を淡々と宣告する。病人には真実を知る権利があり、知ることに

よって自分の予後の人生を設計するべきというところが主流になっている。残酷ではあってもそのような死生観を持つべきであると私も思う。しかし、若いほど告知は無残である。家族に背負わされた十字架は重かった。

夫の前ではさりげなく振る舞い、病室の外に出て私は泣いた。長い廊下を泣きながらあるいた。病院は泣いても不思議ではない場所である。丘の上にあ



る病棟は新緑に囲まれ、5月の日差しは明るく、あらゆる自然の営みが明日に向かって芽吹いていく爽やかな5月の風景を、私は敵意をもって眺めていた。

夫は退院し、自分の本当の病名を知ることなく、日常の生活に戻った。小さな会社の役員をしていた夫が、「癌」に罹患したと知った知人や親せきは、田舎の総合病院では期待できるような治療が受けられないだろうから、癌専門病院に転院すべきだと主張する意見が多かった。しかし、何より夫は主治医を信頼していたし、膵臓癌は手を尽くしても完治は難しいといわれていたので（現在でもそのことに変わりはない）、私は結局そのままにしたのが夫の精神状態のためにはよかったのだと信じている。やがて夏が過ぎ、秋が訪れるころになると、本人も体調不良を自覚するようになった。

9月末、新宿小田急美術館で「田空展」が開催された。夫の趣味は30代から続いている「木彫」で、家の中にもいたるところに彫刻を施していた。小さいものは額縁に始まり、テーブル、椅子、木彫のシヤンデリア、カーテンレール、本箱など、かなり大げさなものに挑戦していて、彫刻刀は吟味して、新

潟の三条市のメーカーから作者の「銘」の入った高級品を次々と取り寄せた。私が顔をしかめるほどの高価なものが多かった。(木箱入りの鑿は夫の死後、兄弟姉妹に形見として分け、義弟はその鑿で能面を掘って贈ってくれて、今も大事に飾ってある)。

夫にとつては待望の円空展であった。私達はロマンスカーで出かけた。館内は暗く、広く、見終わるのにだいぶ時間と労力を要した。円空は生涯に12万体の仏像を彫ったといわれている。一刀彫で掘られた仏像は微笑を浮かべた庶民的なものも多く、仏像にたいする愛情が伝わってくるようであった。夫は満足したようで、自分もまだまだこれから頑張りたいと張り切っていたが、館内の喫茶室に駆け込んで休憩したとき、呼吸は荒く、顔面は真っ白で、その時私はもう夫はそうは長くないと確信した。

それから坂を転げ落ちるように食事が進まなくなり、やせて、体力は日ごとに減少していった。夫にはーもしかしてーという病名に対する疑念はなかったのだろうか。私にはただの一言も聞いただすことはなかった。自分の不調を認めたくないと思ったのだらう。自分を励ましていたのだろと思う。病名を質されらどうしようかという私の不安は杞憂

に終わった。私は信頼されていなかったのかもしれない。

やがて夫は自分から入院したいと希望して私が付き添った。その時すでに夫は車を運転することができず、タクシーを使った。病院の玄関から診察室まで歩くのがやつとであった。これといった治療もなく、鎮静剤のせいか、ひたすらベッドで眠り続けた夫は、ほとんどの痛みを訴えることなく。三週間後、穏やかに息が絶えた。

それからその喧噪は、いまはほとんど記憶がない。当時は自宅での葬儀がほとんどであつ



だが、開館したばかりの葬儀専門会館で執り行った。地方から、めったに会わない親戚も出席してくれてにぎやかであった。でも終わって潮が引いたように人々が去っていき、広々とした部屋に、供花に囲まれた祭壇の夫と取り残されたとき、私は本当にこれから一人で生きていかななくてはならないことを実感した。30歳の長女は赤坂にある貿易会社の社長秘書をしていて多忙だったし、次女は結婚をしていて11か月になる孫をかかえてやはり多忙であった。子どもたちに頼ることはできなかった。その時から27年、「社会的弱者」というレッテルと孤独を道連れに生きてきている。私は孤独と一体化し、もはやそれと感じないくらいに親しんできている。夫が生存中は電球一つ変えることができないほど万事に無能だった私が、一切の雑事を背負って生きてこられたということは、まさに「為せば成る」ことを痛感している。

翌年1月、朝日新聞日曜版の紙面に「いわせてもらおう」という、読者の投稿による、短い笑い話のようなコーナーがあって、当時の我が家の実情を端的に表している小話を応募したら採用された。転載する。

『「争いの種」 夫が亡くなり、諸事に忙殺されたが、一段落したあと、30歳と26歳の娘に言った。「家は財産がないから、遺産で姉妹争うところにならなくてよかったわね」。長女いわく。「財産のない親を将来どちらが面倒をみるかで争うことになるんじゃないの」(前途不安な母)』

夫と私は同じ大学出身で、夫の方が一学年、年長であった。マンモス大学ではなかったが、キャンパスは広く、夫は理学部、私は文学部なので接点はなかった。夫は毎日を研究室で過ごしていたようである。私はといえれば授業もほとんどに喫茶店をはじめとして友人たちと文学論に明け暮れていた。サトルがどうの、



カミュがどうのと、一杯のコーヒードで2、3時間、時間をつぶすのが普通であった。要するに夫は真面目な学生、私はちよつと不良がかった生意気な学生だったということである。ある時、英文科の謹厳実直として知られるS教授が、社交ダンスが得意でセミプロだという噂を耳にした。へえ、あの教授が、と目を丸くするようなニュースであったが、その後、大学の文化祭と同時に行われる寮祭（当時は男子寮しかなかった）のレクリエーションでそのS教授がプロのダンス教師と踊るという情報を耳にした。S教授は寮の舎監であるそうだ。寮祭への参加はもちろんプログラムに記載された正式なものではなく、ほんの飛び入りだということだったが、私は興味をもった。S教授は堅物で、いつも学生ににらみをきかせていて、英文科の友人なども苦手意識を持って、敬遠している人が多かった。仏文科だった私は教授と面識がなかったが、一人で見学に行くことにした。

たかは覚えていない。とにかく女性の身のこなしは洗練されていて、しなやかに、力強く、すべてを圧倒するほどに美しかった。教授の表情もおだやかで学生に厳しいという評判は信じられなかった。「ダンスがお好きですか」と声をかけられた。中肉中背の、制服を着た男子学生が傍にたっていた。「ええ、とても」と私は力を込めて答えた。「S教授はお上手で、あのプロの女性教師はパートナーだという噂です。また寮で踊ることもあると思いますので観にいらしてください」「本当にありがとう、とても楽しかった、また是非」

学生は爽やかな笑顔を残して去っていった。それが私の夫となった人であった。

その後、大学の構内で私達は会うことはなかった。次に会ったのは卒業して数年後、S教授の自宅である。私は卒業してすぐ、丸の内三菱〇〇号館にある小さな貿易会社で英文タイプを打っていた。その2年後、銀座にプティックの大きな店を構えている老舗の「A」の役員の口利きで、当時開店したばかりのNデパートの事務所に転職した。Nデパートは銀座界隈に店舗を持つ老舗の集まりで、一流のブランド商品を扱っている有名店の集まりであった。

昭和30年代の初頭、有楽町に「そごう」が開店してフランク永井のヒット曲、「有楽町で逢いましょう」が街を流れ、「西銀座駅前」がそれに続いて銀座は栄えていた。私は当時の音楽喫茶「ラ・セーヌ」で菅原洋一のシャンソンを聞き、「アシベ」でマヒナスターズのムード音楽に熱中した。また、男性社員に交じって京橋界隈の雀荘をはしごした。

あの当時から、何事かを未来に向けて地道に積み上げていくような建設的な努力を全くしなかった。その時が楽しければそれでよしという自堕落な生き方は私の生涯を通して変わらぬ。私の身に降りかかるだろう人生の末期の悲惨も、私は受け入れざるを得ないのだ。自業自得である。

卒業して数年経ったころ、大学の構内で同期会があり、友人たちと久しぶりに校舎に向かいいった。結婚をした友人は少なく、仲間はみなそれぞれ好き勝手な生き方をしていた。卒業以来、初めて会う人もいて話題はにぎわった。英文科のS教授が学生に囲まれて談笑しているのが目に入った。教授は学部外の私を当然知らないはずだが私は近づいていて声をかけた。

「32年卒の仏文科の卒業生です。在学中に先生

が〇寮で社交ダンスを踊られるのを拝見しました。すばらしかったです。」

先生はきよんとしていたが、やがて破顔し、「いやあ、全くの趣味でね。とんだ余興です。でも覚えておいてくれてよかった」と相好をくずした。現在はそのような生活をしているのかを簡単に聞かれ

た。それから1、2か月後、S教授から、寮で、卒業生を招いてのパーティをやるのでご参加くださいという招待状が届いた。S教授がまた社交ダンスを踊るらしいということだった。私はもちろん参加した。そうして夫と私はS教授の自宅に招かれ、正規に交際がはじまった。

S教授の仲人で私たちは常識的に、厳粛に〇会館で結婚式を挙げた。彼は技術者として神奈川県西部にある会社に勤務していた。やつと市制が敷かれたばかりの、畑にかこまれたのどかな街で私たちは結婚生活を始めた。結婚に何かを期待していたわけでもない。銀座から突然の田舎暮らしである。寂しいだろうと友人や知人は慰める。しかし私は順応した。ネオンの世界も、山々に囲まれ、星に満ちあふれた世界も、夜は平等である。どうして選別す

る必要があるだろう。私は草いきれのなかで2人の子供を育てた。子育てという、かつてなかった建設的な経験をしたことを、本当にうれしく思う。彼女たちは大学卒業と同時に私達のもとを飛び立っていった。夫と私は、もとの二人に戻ったが、数年後、夫までも私のもとを去っていった。夫が丹念に手入れをしていた庭は瞬く間に荒れ、愛情をかけてもらえないモクレンや金木犀の木々は競って枝葉を伸ばし、鬱蒼と茂って薄暗い闇を作った。

長らく同居していた相棒を失って日常は破壊された。壊れた破片を集めて貼り付けた日常はいびつになって元には戻らない。年が明け、長い冬の季節をどのように過ごしたのか、月日はとにかく過ぎていく。季節は巡っていく。桜が散り、新緑が芽生えるころ、一通の手紙が届いた。差出局は東京で、全く心当たりのない男性からのものである。相手も私の名前を知らないように、夫の名前の横に、「御令室さま」とあった。開封し、便箋五枚に及ぶ手紙の内容から、私を知ることのなかった、夫の結婚前のラブ・ロマンスを知らされることになった。手紙の主は夫の大学時代の友人からのもので、ありきたり

な、お悔やみの言葉のあとに次のようなことが記されていた。

大学時代には夫と親しい友人関係であったこと、卒業と同時に会社の都合で海外に派遣され、定年までの40年間でヨーロッパ各地に滞在していたので、心ならずも長いこと交流は途絶えていたが、三月に定年退職して帰国し、夫の死亡を知ったこと。

在学中は、夏休みなどに夫の郷里の兵庫県○○市を訪れ、夫の生家に滞在し、お世話になった。また、当地で、夫の恋人のY嬢を紹介され、一緒に近辺の観光地を案内してもらったこと、Y嬢は聡明で美しく、夫は当然その女性と結婚をしたものと思っていたが、彼女の母親が小料理屋を経営していて正式に結婚をしておらず、所謂、非嫡子であったため、夫の両親が反対して、恋は実らなかったことなどを、帰国後に第三者の友人から知らされたことが、読みにくい、くせ字で長々と書いてあった。

夫亡き後に、今更、私がこのような手紙をもらうなど、想像もしないことだった。妻である私に対して、どのような意図があつて夫の結婚前の恋人の存在を知らせてくれたのか、相手の真意は測りかねた。しかし、私にもなにがしかの疑問を持つような心当

たりもあつたので、やはり、と納得させられた。たとえば、夫の結婚前のアルバムには方々に写真をはがした跡があつた。そこに誰の写真が貼つてあつたのか、問いたしたが納得のいく回答はなかつた。いま、鮮明に「聡明で美しい」一人の女性が立ち上がった。

私は丁寧な札状を書いて次のように締めくくつた。

「私は30年を共に暮らしてまいりましたが、いい妻ではなかつたと忸怩たる思いがございます。結婚前の主人に、そのようなロマンスがあつたことは本当に喜ばしいことだと、心温まる思いがいたしました。お手紙を拝読して、夫もいい人生を送つたのだと、心からうれしく存じます。ありがとうございます。しました。」

文通はそれで終わるはずだった。しかし、最後に次のような手紙を頂いた。

「あなたは旧姓○○さんですね。在学中にキャンパスで何度かお見掛けしました。私は理学部の学生でしたが、二年生の時、教養課程で「社会学」の講義がご一緒でした。あなたは私をご存じないかもしれませんが、私は強く印象に残っています。まさか彼

があなたと結婚したとは驚きです。できれば一度お目にかかつて彼の話を伺いたいと思うのですが、いかがでしょうか。」

私は返事を出さなかつた。手紙の主に対して、再びペンを持つことはなかつた。

(2021年12月)

